1. 日本軍によるグアム島占領と軍政

1941(S16)年
12月 8日　真珠湾攻撃
12月10日　日本軍グアムを占領。
グアムに軍政を敷く。

ハワイの真珠湾攻撃による開戦と同時に、日本軍はグアムを爆撃、南海支隊を派遣し、1.①松山(メリッソ:Merizo)・②馬田(ウマタック:Umatac)、2.③太郎(タロフォフォ:Talofofo)、3.④富田(タモン:Tumon)の三方面から上陸、軽微な損害で占領に成功しました。

占領統治(軍政)は、1944年7月米軍の再上陸までの2年半に及びました。

この作戦の目的は、中南部太平洋の戦略態勢を有利にし、南方進攻作戦の左側面を俺護することにありました。

日本の軍政下では、グアムを⑤大宮島と改名し⑥明石(アガナ:Agana)、⑦品川(シナハナ:Sinajana)、⑧稲田(イナラハン:Inarajan)など日本語の地名を付け、占領直後には、キリスト教聖職者をも残地させ、米兵や島民の死者への慰霊碑を建立し、本格的な軍政の実施に着手しました。

◀ 7月21日　上陸する米軍
(Album WAPA 2910;National Park Service)

▲7月21日　米軍上陸:仮設陣地の米軍に対し、夜襲をかける日本軍
「戦争スケッチ」小林喜一氏戦友作画(長野県)

2. 戦局の推移と絶対国防圏の設定

1942(S17)年
3月 7日　大本営:「今後採るべき戦争指導大綱」
(方針:戦果を拡充、不敗の態勢を整える)
6月 5日　海軍:ミッドウエー海戦の惨敗

1943(S18)年
5月29日　日本軍、アッツ島玉砕
9月 8日　イタリー無条件降伏
9月30日　御前会議:"絶対国防圏"を決定
(方針をこれまでの攻勢から防勢に変更)

開戦2年、戦況は悪化。昭和18年9月、大本営(※)はマリアナ諸島(サイパン、グアム、テニアン等)を「絶対国防圏」(※)の第一線とすることを決定した。この背景にはマリアナ諸島の欠陥はB-29(※)による本土爆撃を招く恐れがあるとされたからである。このため、従来海軍の守備担当であった中部太平洋方面に、陸軍の第31軍を創設し、第29師団(在満州)をグアムに、第43師団(在本土)をサイパンに派遣しました。既に、途中の海域は米潜水艦の跳梁するところとなっており、一部輸送船は海没して多数の犠牲が出ました。

※大本営(だいほんえい):戦時に設けられる最高司令部
※絶対国防圏:「帝国戦争目的達成上絶対確保を要する圏域」の略で千島、小笠原、内南洋及び西部ニューギニア、スンダ、ビルマを含む圏域のこと
※B-29:超空の要塞と呼ばれた米軍の大型爆撃機。航続距離は9,350km

戦跡マップ

3. 米軍のサイパン上陸とマリアナ沖海戦

1944(S19)年
2月19日　大本営:第29師団動員完結
5月下旬　マリアナ地区基地航空、全整備実数1,188機に達する。
6月15日　米軍サイパン上陸開始。日本軍第31軍司令官は視察のためパラオに出張中で不在。
6月20日　マリアナ「あ号作戦」の完敗。→日本軍はサイパン・グアム・テニアン等の制海、制空権を喪失。
7月 7日　日本軍:サイパン島玉砕

大本営では、次に米軍が上陸してくるのはサイパン方面ではなくパラオ方面(西カロリン諸島)であると判断しており、仮にサイパンに上陸していたとしても「サイパンは難攻不落」と楽観的に考えていました。しかし、米軍はサイパン島に上陸してきました。不意を付かれた日本海軍は、ただちに米艦隊を撃滅しようとして「あ号作戦」を発動し、「マリアナ沖海戦」を戦いましたが、アウトレンジ戦法(※)は失敗し、機動部隊が壊滅したため大本営ではサイパン放棄を決定、サイパン守備隊は玉砕してしまいました。

※アウトレンジ戦法:日本の空母艦載機の航続距離が長いという利点を活かして米空母艦載機の攻撃範囲の外から攻撃しようとする戦法

1) 米軍のグアム攻略方針
米軍は、サイパン攻略に予想外の抵抗を受けたことから、グアムの攻略には第二次大戦でも他に例を見ない二週間に及ぶ大規模かつ長期の砲爆撃を行いました。

2) グアム島の防備方針と戦力配置
日本軍はグアム島西海岸(⑥明石:アガニア Agana湾、⑨昭和:アガット Agat湾)への米軍上陸を想定。水際(すいさい)撃滅(※)の方針で部隊を沿岸部に配置し、後方への島民の強制移住を行なっていました。
日本軍のグアム島守備隊は、第31軍司令部(軍司令官 小畑英良 中将)、第29師団(師団長 高品 彪中将)等、約2万人からなっていました。
在留邦人は大半が日本本土に送還されていましたが、米軍上陸時には男子約100名、女子約50名、計約150名が在島していました。

※水際撃滅:敵の上陸の対する防御要領のひとつであり、上陸部隊を水際付近で撃滅しようするものであり、他には内陸部で撃滅する要領もある。当時の日本軍の考え方としては、敵の上陸部隊の大半は日本艦隊によって撃破されるため上陸してくる米軍は容易に水際で撃滅できるとされた。